

「最高法院での裁判」

2014年11月28日

マルコによる福音書 14 章 53 節～65 節。 人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである。すると、数人の者が立ち上がり、イエスに不利な偽証をした。この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました。」しかし、この場合も、彼らの証言は食い違った。そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。イエスは言われた。「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、／天の雲に囲まれて来るのを見る。」大祭司は、衣を引き裂きながら言った。「これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は冒瀆の言葉を聞いた。どう考えるか。」一同は、死刑にすべきだと決議した。それから、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみろ」と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った。

上記の出来事は「最高法院の裁判」と言われているが、この裁判は正規の裁判とは言えない。時は真夜中、場所も大祭司の庭で、律法に基づく裁判としては成立していない。「降格儀式」と言われるものである。中国の「文化大革命」の時、反革命分子と名指された人々に三角帽子をかぶせ、胸に罪状の札を吊るし、公衆の面前で侮辱をあびせ、罪に定めていく裁判が行われた。公開の民衆裁判であった。典型的な「降格儀式」である。主イエスを裁いた主役は最高法院であったが、エルサレム神殿の權威に群がる人々に囲まれ、違法な尋問と人格を否定する侮辱の中で、罪状が認定されていった。

最高法院は祭司長、律法学者、長老から選ばれた 71 名の議員によって構成され、最も權威ある裁判所である。彼らは、主イエスを無(亡)き者にすることが大命題であった。死罪にするため、様々な証言、偽証がなされたが、それらは食い違い、罪に定めることができなかった。イスラエルの裁判は証言が合致した時、罪に認定した。主イエスはただ沈黙しておられた。苛立った大祭司は立ち上がり、自らが問うた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」主イエスは、不利な証言に対して、何の弁明もされなかった。尋問できない立場にあった大祭司の「お前はほむべき方の子、メシアなのか」との問いかけに、主イエスは初めて口を開いた。「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」

「ほむべき方の子、メシアか」、「そうです」。この会話は自分は神と同等の者であることを言い表し「冒瀆罪」に当たる。大祭司は衣を裂く大げさな振る舞いをして「これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は冒瀆の言葉を聞いた。どう考えるか」と煽った。一同は死刑にすべきだと決議した。唾を吐きかけ、こぶしで殴りつけ、平手で打った。最高法院は営々と築き上げてきた宗教体制を壊す主イエスを冒瀆罪の罪状で葬り去ることができると喜んだ。主イエスは沈黙し、真夜中の無法と侮辱の裁判に耐え続けた。